

# 小学校教師からみた保護者の養育レジリエンスへの支援

柳川 玲子\*・藤田 一郎\*\*

Support for parenting resilience from primary school teacher's point of view

Reiko YANAGAWA and Ichiro FUJITA

## 概要

小学生保護者の多くが子どもの養育や学習に不安を感じており、養育困難に良好に適応する「養育レジリエンス」の向上が検討されている。教師が教育的支援を進めていくためには学校と家庭の連携が必要であり、本研究では小学校教師からみた保護者の養育レジリエンスへの支援を検討した。小学校教師、小学校保護者と発達障がい者親の会保護者に対し、子育てに関する学びや支援の利用の実状について質問紙調査を行った。

小学校保護者の情報の入手や学びは身近な人やインターネットの利用を挙げていた。教師は、保護者が子育てに関して専門家から学ぶことや支援を利用することは、保護者の養育レジリエンスを向上させ、学校と家庭の連携に効果的と考えていた。親の会保護者はグループ活動による専門家からの学びや支援を利用しており、教師の考える保護者支援と類似していた。また、教師は医療、福祉、心理専門家と連携して保護者の養育レジリエンスへの支援を行い、研修等により保護者との共通認識を持ち、適切な教育的支援を行っていくことが重要であると考えた。

キーワード：小学校教師、保護者、養育レジリエンス

## I. はじめに

学校教育法が改定されて2007年4月より特別支援教育が実施されており、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育的支援が学校と家庭で連携して行われていくことが求められている。特別な教育的ニーズのある児童の中には発達障害をもつ児童が含まれており、その養育者は子育てに困難さを感じる人が多いとされている<sup>1)</sup>。したがって、教師は児童へのより効果的な指導だけでなく、保護者支援のためにも家庭や地域との協力が大切である。しかし、教師と保護者の協力がうまくいかない場合があり、笠井は教師が保護者との関係に関する困難な点として、児童の行動の理解において「家庭と学校の認識のズレ」があることを述べている<sup>2)</sup>。

子どもや家庭を取り巻く環境は多様化し、家庭の教育力の低下が指摘されている。小学校に子どもが在籍する期間は6年と長く、小学生を持つ多くの保護者が子どもの「しつけ」や教育に不安を感じていると報告されている<sup>3)</sup>。また、保護者自身が仕事で忙しいなど、子育てについての学びの方法や支援の状況も変化している。

稲垣は保護者のレジリエンスすなわち「困難な状況においても克服できる力」に着目し<sup>1)</sup>、保護者自身が「養育困難があるにも関わらず、良好に適応する過程」を養

育レジリエンスと定義している。養育レジリエンスの3要素は、①子どもに関する知識を豊富に持っていること、②社会的に十分な支援を受けていること、③育児を行うことを肯定的に捉えていることである。

学校と家庭の連携への効果に関する先行研究を調査したが、教師が教育的ニーズに応じた教育的支援を行う上で、保護者が支援を利用することによる養育レジリエンスへの影響を検討した報告は見当たらない。したがって、本研究ではこの養育レジリエンスに着目し、小学校教師からみた保護者の養育レジリエンスへの支援について検討する。

## II. 目的

保護者が子育てについて学びや情報を入手する方法や利用している支援について着目し、小学校教師が保護者と連携して教育的支援を行う上で効果があると考えられる方法と保護者の実状を明らかにする。また、小学校保護者、発達障がい親の会に参加する保護者がそれらを利用することにより保護者自身に及ぼす養育レジリエンスへの影響と、児童への教育的ニーズに応じた教育的支援を行う上で学校と家庭の連携に及ぼす影響について検討する。

\* 福岡女学院大学大学院研究生

\*\* 福岡女学院大学

### Ⅲ. 方法

2019年12月～2020年6月に質問紙調査を実施した。対象者は九州北部地区の公立小学校の教師および保護者と、九州北部地区の発達障がい者親の会保護者（以後は小学校教師または教師、小学校保護者、親の会保護者と記述）である。

保護者の子育てにおける困り感への対応と、学校や教師との連携における問題点について質問紙で調査し、保護者が親の会に参加することにより子育てに及ぼす効果と家庭と学校の連携への効果について、養育レジリエンスに着目して検討した。

質問紙の問1は、学校生活における行動について、山口・飯田・石隈により作成された学校生活スキル尺度（小学生版）と<sup>4)</sup>、嶋田により作成された小学生用学校ストレス尺度<sup>5)</sup>、平成29年度全国学力・学習状況調査の調査問題より<sup>6)</sup>、児童の家庭生活と学校生活での関係の深い行動について20項目を抽出し設問をもうけた。設問は、学習に関すること8項目、生活に関すること8項目、健康に関すること4項目である。「1. まったくあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」までの6件法での回答とした。

設問ごとに小学校教師、小学校保護者、親の会保護者の3グループによる一元配置分散分析を行い、更にTukey法を用いた多重比較を行なった。

#### (1) 小学校教師への質問紙調査

対象者は九州北部地区の公立小学校に勤務または退職後2年未満の教師23名（在職20名、退職2年未満3名）である。児童の学校生活において家庭生活の影響があらわれる行動と、児童の学校生活の行動に関して保護者が子育てについて学ぶことの影響について質問紙調査を実施した。また、教師が保護者との連携に効果があると思う方法について17項目の選択肢から回答を求めた。最後に、保護者が子育てについて学ぶことへの効果について自由記述による回答を求めた。

#### (2) 小学校保護者への質問紙調査

対象者は九州北部地区の公立小学校に在籍する児童の保護者74名（2年22名、5年24名、6年28名）である。保護者の子育てに関する学びや支援を利用した経験について17項目の選択肢から回答を求めた。また、児童の行動について保護者が実際に感じている困り感や工夫していることについて自由記述による回答を求めた。

#### (3) 発達障がい者親の会保護者への質問紙調査

対象者は九州北部地区の発達障がい者親の会に参加している、発達障害をもつ子どもの保護者36名（小学生の保護者11名、中学生以上の保護者25名）である。子どもが小学生の時の家庭生活について質問紙調査を実施し

た。保護者が子育てのなかで困っていたこと、工夫したることについて自由記述による回答を求めた。

#### (4) 倫理的配慮

質問紙調査を実施するにあたり、調査対象者に対して、研究の目的、個人情報の取り扱いには十分な配慮をすること、回答についてはその内容から所属団体や個人が特定されないよう匿名化すること、また、研究結果は修士論文としてまとめることを口頭及び文書にて説明して同意を得た。本研究は福岡女学院大学研究倫理委員会の承認を得た。受付番号19026. 判定日2019年11月18日

### Ⅳ. 結果及び考察

#### 1. 子どもの家庭生活と関連する学校生活の行動に関する質問紙調査

対象者は九州北部地区の公立小学校児童の保護者74名（有効回答者数67名）、九州北部地区の発達障がい者親の会の保護者36名、九州北部地区の公立小学校に勤務または退職後2年未満の教師23名であった。3グループを対象に児童の学校生活と関連の深い家庭生活での行動（児童の行動と記述する）について学習面（8項目）、生活面（8項目）、健康面（4項目）の3領域について分析を行った。3グループの合計による学習面の平均値は4.10 ( $SD = 1.02$ )、生活面の平均値は3.91 ( $SD = 1.18$ )、健康面の平均値は4.46 ( $SD = 1.02$ )であった。

次に、児童の行動について、小学校教師、小学校保護者、親の会保護者を独立変数とし、学習面、生活面、健康面の得点の平均を従属変数として一元配置分散分析を行なった。更に各グループ間におけるTukeyの多重比較を行なった。結果を表1に示す。学習面、生活面、健康面の3領域全てにおいて、親の会保護者と小学校保護者、親の会保護者と小学校教師に有意差があり、親の会保護者から見た児童の行動の得点が低かった。その理由として、親の会に参加している児童は、それぞれの特性によって苦手なことがあり、小学校保護者と小学校教師では、小学校に所属している児童の行動について回答しており、小学校教師は担当している児童全体から考えられる得点をつけていることによると考えられる。

#### 2. 子育ての学びと支援利用に関する小学校保護者の実状と小学校教師の考え（図1）

小学校教師が児童への指導や保護者への支援を行う上で、保護者との連携において効果があると考えられる保護者が子育てについて学んだり情報を得たりする方法と、小学校保護者が実際に利用している方法や支援について同じ選択肢を用いて回答を求めたところ、小学校教師の考えと小学校保護者の実状には差異が見られた。

小学校教師が児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援のために保護者と連携や支援をしていく上で効果的であった、またはあると考える方法や支

表1. 子どもの家庭生活と関連する学校生活の行動に関する分散分析

	A：小学校教師 (n = 23)		B：小学校保護者 (n = 67)		C：親の会保護者 (n = 36)		F (2,123)	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
学習面	4.61	0.89	4.46	0.75	3.11	0.85	38.56***	A>C* B>C*
生活面	4.74	0.96	4.22	0.92	2.81	0.95	37.87***	A>C* B>C*
健康面	5.13	0.69	4.69	0.94	3.11	0.77	26.37***	A>C* B>C*

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

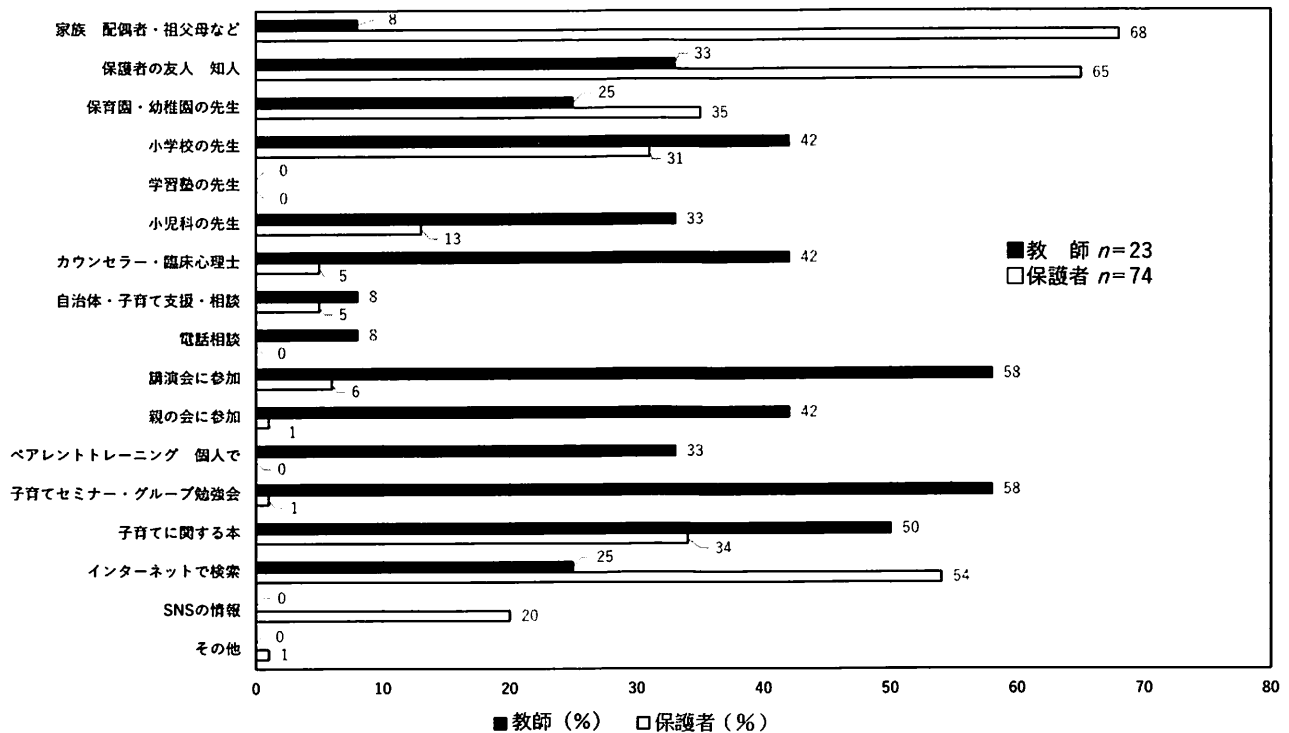


図1. 子育ての学びと支援利用に関する小学校保護者の実状と教師の考えの比較

援は小学校教師、臨床心理士、医療、教育などの専門家や、保護者同士がグループで参加する機会であった。小学校保護者が利用している方法は家族（児童の父母、祖父母など）が最も多く、ついで保護者の友人、知人などであった。また、小学校保護者に特徴的なことはインターネットやSNSの利用であった。

### 3. 小学校教師の自由記述における養育レジリエンスに関する事情と特徴について (表2)

小学校教師が考える、保護者が子育てについて学ぶことや様々な支援を利用することによる効果を、養育レジリエンスの3要素である①子どもに関する知識を豊富に持っていることに関して〈保護者の児童の行動・性格・特性に関する効果〉、〈保護者の子育てに関する知識・技能への効果〉、②社会的に十分な支援を受けていることに関して〈教師と保護者の関係・学校との連携への効果〉、〈保護者への社会的支援による効果〉、③育児を行

うことを肯定的に捉えていることに関して〈保護者自身への効果〉に、自由記述の内容について分類を行った。

小学校教師は、保護者が専門家から学ぶことや、情報を得ることで、児童の行動や性格、特性について理解が進み、教師と共通理解が持てることで、家庭と学校が連携していくことができるようになって考えていた。また、保護者自身にとっても、専門家や同じ悩みを持つ仲間ができることで、心に余裕が生まれ、子育てに肯定的な気持ちを持てるようになって考えていた。

このことから、教師は、親の会などのグループで子育てについて学ぶことや支援を利用することは、保護者の養育レジリエンスを向上させ、学校と保護者の連携に効果的であると考えていると言える。

### 4. 小学校保護者の自由記述における養育レジリエンスについて

小学生保護者が、子育てにおける困り感と工夫してい

表2. 小学校教師が考える保護者が支援を利用することによる連携への効果の事情別内容とその頻度 (n=23)

No.	事情	内容	件数 (%)
1	保護者の児童の行動・性格や特性に関する効果	・子どもの特性を理解する。 ・子どもを客観的に見ることができる。 ・発達障害等への理解や接し方、対処法が共有できる。等	9 (39.1)
2	保護者の子育てに関する知識・技能への効果	・様々な子育て方法を知ることで視野が広がる。子育ての知識を得る。 ・他者の声や考え方に耳を傾け、自分の子育てに取り入れようとする。等	13 (56.5)
3	教師と保護者の関係・学校との連携への効果	・早めに対応できる(特別支援など)。 ・学校と家庭が価値観を共有し、役割分担、相互協力がしやすくなる。 ・信頼関係を育むきっかけになる。 ・皆が対立したり不信感を持ったりすることがなくなる。等	19 (82.6)
4	保護者への社会的支援による効果	・専門家や経験者(同じ悩みを持つ先輩保護者)の話を聞くことによって安心したり解決できたりする。 ・問題解決の手段ばかりでなく、安心感や連帯感を得ることができる。 ・自分で悩むのではなく、学校や周りの協力してくれる人と共有することで、子供にも本人とっても良い効果が現れると思う。等	6 (26.0)
5	保護者自身への効果	・子の良さを認めようとするようになる。 ・保護者の心に余裕が生まれる。 ・子育てについて学ぶことで少しでも安心感が持てる。 ・子どもを傷つける言動の抑止力になる。等	17 (73.9)
6	その他教師自身に関する事	・教師自身も、常に謙虚な姿勢で学び合おうとすることが必要。 ・学校や個々の職員が保護者にエールを送り続ける者であるべき。 ・学校からの情報提供や家庭との連携への取り組みも不可欠。等	4 (17.3)

事情別合計件数 68

表3. 小学校保護者の持つ困り感の事情別内容とその頻度 (n=74)

No.	事情	内容	件数 (%)
1	児童の行動・性格・特性に関する事	・ルールを理解することが苦手。 ・集中力がない。 ・自分の思っていることを上手く伝えられないことがある。 ・親の言う事を聞かない。等	22 (29.7)
2	児童の学校・学習に関する事	・意欲がない。 ・集中力がなく根気強く勉強をがんばることができない。 ・学校へ行かなくなった。 ・家庭での宿題の取り組みや、やる気が学年が変わるたびにかわる。等	12 (16.2)
3	児童の友人関係に関する事	・学校での友人関係を築くのがきつそう。 ・友達との関係で担任には相談するが私にはその子にどう接したらよいかわからない。 ・自分をさらけ出して本音を言える友達がいるか心配。等	8 (10.8)
4	保護者の子育てに関する知識・技能	・わかりやすくルールを教えるのが難しい。 ・上手にしかる、上手にほめる、あまえさせるのが難しい。 ・ゲーム、SNS(まだ使用なし)の扱い方が難しい。 ・子ども3人に同じように対応して育てても、育ち方は全く違い難しい。等	12 (16.2)
5	学校と家庭の連携に関する事	・先生との向き合い方。学校の先生に差がある。 ・保育園の時は毎日の連絡ノートで、相談もしやすかったが、小学校に入ってから難しくなった。 ・宿題の出し方や量が先生によって差が大きすぎる。 ・教師との信頼関係が築きにくい。等	5 (6.7)
6	地域や周りの人などのサポート		0 (0)
7	保護者自身に関する事	・丁寧に書くよう指摘したり訂正させると、泣きながら怒り、苦痛です。 ・なかなか親が思うようにはならないなあと感じる。 ・ゲーム、ネット社会への不安。 ・わからないところを教える時間が私になかなかない。等	7 (9.4)
8	その他	・特になし。未記入	26 (35.1)

事情別合計件数 92

表4. 小学校保護者が子育てにおいて工夫していることの事情別内容とその頻度 (n=74)

No.	事情	内容	件数 (%)
1	児童の行動・性格・特性に関すること	・ゲーム、ユーチューブなど時間をどう守らせたらいいか工夫しています。 ・子どもにあいさつはしっかりしない方が恥ずかしいということを伝えていきます。 ・わかりやすく絵で描いて説明しています (ルール)。等	6 (8.1)
2	児童の学校・学習に関すること	・文字や数字を丁寧に書く必要性について説明する。 ・宿題をとなりにつきそって一緒にやる。 ・ドリルを色々買い、興味を引く。等	8 (10.8)
3	児童の友人関係に関すること	・高学年になったので、これからは自分の意思をはっきりと持ち、相手にきちんと伝えていくという事を教えているところです。 ・友達のことで落ち込んでいる時は、私の経験した事をたとえにして話しています。等	4 (5.4)
4	保護者の子育てに関する知識・技能	・手伝いをすすんでしてくれた時も、必ず「ありがとう」と伝える。 ・小さなことにもほめて伝えます。 ・達成感を味わってもらい、次につなげる。 ・1週間のスケジュールリングを行い、日々の行動を明確にしている。 ・集中力をつけるトレーニング。等	24 (32.4)
5	学校と家庭の連携に関すること		0 (0)
6	地域や周りの人などのサポート		0 (0)
7	保護者自身に関すること	(学校へいなくなった) 学校の話題を一時、しないようにしている。 ・もやもやしていることや解決できないことが残らないようにする。 ・一方的おしつけにならぬよう気をつけているが、できずに怒ってしまい後悔することもあり反省します。	9 (12.1)
8	その他	特にない。未記入	38 (51.3)

事情別合計件数 89

ることについて自由記述への回答を、小学校教師と同様に養育レジリエンスの3要因から、8の事情に分類して単純集計を行なった。

**(1) 小学校保護者の持つ困り感について (表3)**

小学生保護者の持つ困り感では、①子どもに関する知識を豊富に持っていることについて、児童が「生活上でのルールを理解することが苦手」「集中力がない」学習において「意欲がない」「友人関係を築くのが難しそう」等があった。②社会的に十分な支援を受けていることについて、小学校保護者の回答によると学校と家庭の連携に関する困り感として、「教師との信頼関係が築きにくい」等、教師との関係において迷いが生じる原因になっていることを述べていた。③育児を行うことを肯定的に捉えていることについて、保護者が子育てについて持つ困り感として、保護者自身の焦りや「なかなか思うようにはならないなあと感じる」等の回答があった。

**(2) 小学生保護者が工夫していること (表4)**

子育てについて工夫していることとして、①子どもに関する知識を豊富に持っていることについて、「ルールを設けたり注意したりするときには、わかりやすく絵に描いて説明しています」、学習については「となりにつきそって一緒にやる」等が述べられていた。また、【ほめる】ことで「達成感を味わってもらおう」という記述が複

数見られた。今回の質問紙調査において、②社会的に十分な支援を受けていることについて、〈学校と家庭の連携に関すること〉、〈地域や周りの人などのサポート〉に関する回答はなかった。③育児を行うことを肯定的に捉えていることについて、「もやもやしていることや解決できないことが残らないようにする」等、児童への対応を工夫していた。

**(3) 小学校教師の考える小学校保護者への支援の実状と養育レジリエンスについて**

小学校保護者は、子育てで持つ不安や困り感に対応する方法として家族や友人、インターネット、小学校教師などから学びや情報を入手して、子どもと向き合いながら対応していることがわかった。本調査の回答の中に不登校についての記述があるが、養育レジリエンスの3要因に関して専門家や社会的な支援の利用は述べられておらず、保護者が専門的な支援を利用していないことが示唆される。保護者が子育てについて学ぶことや専門家から情報を得ることで、保護者が子どもの困り感に気づいていない場合や、特に支援が必要と考えられる場合に、学校や地域と連携し社会的な支援の利用につながることができると考えられる。また、保護者が子育てについて学ぶことや、社会的支援を利用することで、養育レジリエンスが向上することが示唆される。

表5. 親の会保護者の持つ困り感の事情別内容とその頻度 (n=36)

No.	事情	内容	件数 (%)
1	児童の行動・性格・特性に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安の大きさから、外出もデイ以外はほとんどできていない状態。</li> <li>・集団に合わせる事が難しかった。</li> <li>・納得できないと先に進めなかった。</li> <li>・こだわりが強かった。</li> <li>・ペース配分が苦手で、突っ走って息切れする不安が大きい。</li> <li>・クラスメイトに嫌なことを言われパニックを起こしていた(発達障害によるパニック)。</li> <li>・音がうるさくてきつい。等</li> </ul>	15 (41.6)
2	児童の学校・学習に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登校しぶり。</li> <li>・宿題に時間がかかり寝不足になり、ますます朝起きられない。</li> <li>・不登校。</li> <li>・教室のザワザワが嫌で、机の下に潜って出て来なかったり教室を飛び出したりしていた。</li> <li>・読むことや書くことが苦手。等</li> </ul>	16 (44.4)
3	児童の友人関係に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の正義を友達にも当てはめる。</li> <li>・興奮すると、先に手がでてしまい、よくトラブルになっていました。</li> <li>・周りの人に気持ちを伝えられなかった。</li> <li>・自己尊敬力の低下につながった。等</li> </ul>	9 (25)
4	保護者の子育てに関する知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学に入り診断を受けられてから、ようやく小学校の頃色々な困り感があったはずだとわかりました。等</li> </ul>	2 (5.5)
5	学校と家庭の連携に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・管理職、現場の先生方とももっと研修を受けてから子どもに対応してほしい。</li> <li>・ひどくしかる先生は、その怒声が他の子を怯えさせることも考慮せず、自分の指導が正しいと信じているので残念。</li> <li>・発達障害に理解のない先生。</li> <li>・宿題に毎日×がついてノートが戻り、やり直しをさせられていたがどこが間違いかわらず親子で苦労した。等</li> </ul>	4 (11.1)
6	地域や周りの人などのサポート		0 (0)
7	保護者自身に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イライラの原因や急に不安になる原因がわからなかった。</li> <li>・「発達障害」という言葉を知っていても、実態を知らない、どう接していいかわからないという周囲の無理解な励ましや言葉、態度に傷つけられとても辛い時がある。</li> <li>・中学に入り診断を受けられてから、ようやく小学校の頃色々な困り感があったはずだとわかりました。</li> </ul>	2 (5.5)
8	その他	未記入	5 (13.8)

事情別合計件数 53

## 5. 親の会保護者の自由記述における養育レジリエンスについて

親の会保護者による子育てにおける困り感と工夫していることについての自由記述の回答を、小学校教師と同様に養育レジリエンスの3要因から8の事情に分類して単純集計を行なった。

### (1) 親の会保護者の持つ困り感について (表5)

親の会保護者の子育てにおける困り感を、自由記述の内容について単純集計を行った。養育レジリエンスの要因①子どもに関する知識を豊富に持っていることについて、「音がうるさくてきつい」等、特性に関することや、行動について述べられていた。学校や学習に関する困り感では、「登校しぶり」「教室のザワザワが嫌」等学校や教室など環境からくる困り感、「読むことや書くことが苦

手」等、学習に関する困り感などが述べられていた。児童の友人関係について、「周りの人に気持ちを伝えられなかった」ことなどから、「自己尊敬力の低下につながった」等が述べられていた。②社会的に十分な支援を受けていることに関する困り感では、「(他の子を) ひどくしかる先生は、その怒声で他の子を怯えさせる」、「発達障害に理解のない先生」等教員の発達障害についての知識や理解に関する記述があった。③育児を行うことを肯定的に捉えていることについて、親の会保護者が感じている不安や困り感に関する記述では、児童が発達障害との診断を受けるまでのことについて、「イライラの原因や急に不安になる原因がわからなかった」ために、保護者自身が戸惑っていたことが述べられていた。

### (2) 親の会保護者が工夫していることについて (表6)

親の会保護者の子育てで工夫していることについて、

表6. 親の会保護者が子育てにおいて工夫していることの事情別内容とその頻度 (n=36)

No.	事情	内容	件数 (%)
1	児童の行動・性格・特性に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人のペースを尊重。お腹が空くとイライラ小さいおむすびを忍ばせて食べていた。</li> <li>・時間割を見て、前日にスケジュールを本人に選ばせています。</li> <li>・持ち物のチェックをしてあげています。</li> <li>・生活リズムをあまり崩さないようにした。等</li> </ul>	11 (30.5)
2	児童の学校・学習に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鉛筆はシャープペン、ペンにする。</li> <li>・読み書きに困難があるので、音読の宿題の読み聞かせや、音読する量を調節し、負担を軽くした。</li> <li>・本を読んで知識を身につけるのが難しいため、図鑑のDVDやNHKの映像番組などをよく活用するようにした。等</li> </ul>	14 (38.8)
3	児童の友人関係に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中休みや昼休みに校庭で友達と遊んでいる。</li> <li>・子ども達の理解やサポートもとても大きかった。</li> <li>・家に友達を呼んで一緒に遊んでもらった。等</li> </ul>	4 (11.1)
4	保護者の子育てに関する知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚支援（おめめどうのメモを使用）しています。</li> <li>・Ipadのアクセスリーディング。</li> <li>・心の中で5つ数えてから行動を起こすよう伝えていました。</li> <li>・予め練習。本人がどこまでなら頑張れるのかを本人ときちんと相談し、ゴール（目標設定）を決めていた。</li> <li>・イヤーマフ、メガネを利用。等</li> </ul>	12 (33.3)
5	学校と家庭の連携に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・字を書くことが苦手なので、ノートをとらなくても良いしてもらっていた。</li> <li>・ゴール（目標設定）を明確にすることでクラスの活動に参加でき自尊心を損なわずに学校生活を送れた。</li> <li>・6年生から特別支援クラスにチェンジ。</li> <li>・先生や周りの子ども達の理解やサポートもとても大きかった。</li> <li>・先生とノートを作ってやりとりを行っていました。</li> <li>・毎日サポートシートを作成し、年度始めに先生にわたして特性や本人の気質についてお話して、本人にあった配慮をお願いしていた。</li> <li>・担任の先生との信頼関係を作るために協力をお願いする。等</li> </ul>	15 (41.6)
6	地域や周りの人などのサポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を隠さずオープンに学校や地域の人にも理解が得られるように努めた。</li> <li>・子どもが気の合う友達の母親と連絡を取り友達に遊びに来てもらう。</li> <li>・塾の先生に、できた時の褒め方等、色々教えていただき実行した等</li> </ul>	6 (16.6)
7	保護者自身に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家ではリラックスできるようにしていた。</li> <li>・子どもの話をよくきいてあげた。</li> <li>・できるだけ家庭内でコミュニケーションをとるように心がけていました。</li> <li>・家の中を楽しくした 家族みんなで遊んでいた。等</li> </ul>	7 (19.4)
8	その他	未記入	3 (8.3)

事情別合計件数 72

「お腹が空くとイライラするので、小さいおむすびを忍ばせて食べていた」等、児童が行動する上で不安にならない準備や行動をサポートするなどの工夫について述べていた。学習に関することでは、「鉛筆をシャープペンにする」「図鑑のDVDやNHKの映像番組などをよく活用」等、学習のサポートについての記述があった。児童の友人関係に関することでは「子どもたちの理解やサポートが大きかった」「家に友達を呼んで一緒に遊んでもらった」等、担任の協力や保護者自身の工夫について記述があった。保護者の子育てに関する知識・技能では、「視覚支援（おめめどう）のメモを使用した」「イヤーマフ、メガネを利用」等、保護者が専門家などから学んだ知識や技能を子育てに実践していたことがわかった。②社会的に十分な支援を受けていることについて、「毎日サポー

トシートを作成し、年度始めに先生にわたして特性や本人の気質についてお話して、本人にあった配慮をお願いした」「先生とノートを作ってやりとりを行っていました」等、学校と情報を共有し、保護者からも学校と連携できるよう働きかけていた。また、地域や周りの人などにも「障害を隠さずオープンにして学校や地域の人々にも理解が得られるように努めた」「子どもが気の合う友達の母親と連絡を取り、友達に遊びに来てもらう」等、保護者自身が学校以外に対しても理解と協力を得られる体制作りをしていた。③育児を行うことを肯定的に捉えていることについて、「家族みんなで遊んでいた」「家の中を楽しくした」等、記述があった。親の会保護者自身が家庭においてしている工夫は、家庭環境を心地よいものにするにより、家庭が児童にとってリラックスし

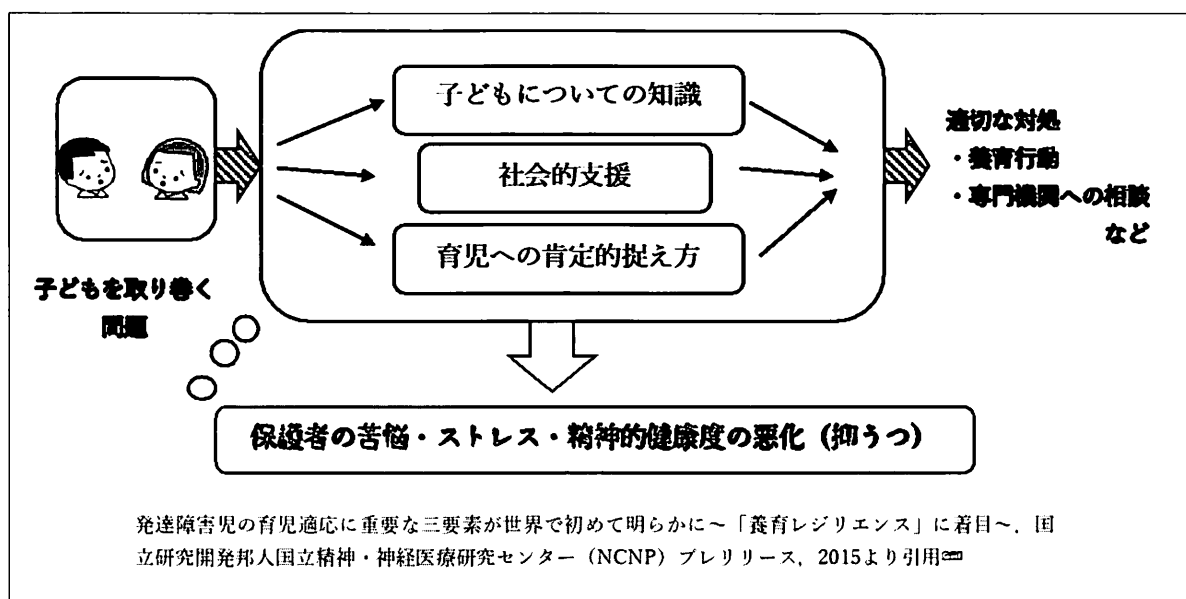


図2. 養育レジリエンスのモデル

て生活できる場所であり、保護者自身にとっても兄弟などの家族にとっても肯定的に家庭生活を送ることができるようになると考えられる。

### (3) 小学校教師の考える保護者への支援と親の会保護者の養育レジリエンスについて

親の会保護者のもつ子育ての困り感と工夫について、養育レジリエンスの3要因に関する事情からみると、全ての事情において親の会での活動や専門家からの指導や仲間との学びの機会、活動の実践により、養育レジリエンスが向上していると示唆される。親の会への参加は、保護者と連携していく上で効果が望めると42%の教師が回答しているが、このことと合致するものであった。

これらのことから、親の会の活動は、教師が保護者と連携して児童への支援や教育的ニーズに応えていくために効果があると考え、子育てについて学びや情報を入手する方法と社会的支援の方法であると言える。

## V. 総合考察

本研究では、児童への教育的ニーズにおいて教師と保護者が共通理解して連携する上で効果があると考え、支援に関して小学校教師の意見を小学生保護者と親の会保護者の養育レジリエンスに視点を置き、質問紙調査によって検討した。

小学校において特別な教育的ニーズに応じた指導を進めていく上で、学校と家庭の連携が必要とされている。保護者との連携の重要性について、岡村は特別な教育的ニーズのある児童を育てていくにあたっては、保護者との連携および保護者支援が欠かせないものであり学校の先生として認識しておかなければならない、保護者支援は学校の先生が「すべき」ことであると述べている<sup>7)</sup>。

担任教師による保護者支援については、文部科学省による「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育的支援体制整備ガイド」に「通常の学級の担任は、保護者が児童等の教育に対する第一義的支援を有するものであることを意識し、保護者と協働して、支援を行います。」と明記されている<sup>8)</sup>。その内容として(1)保護者との信頼関係の構築、(2)個別的教育支援計画の保護者との共有、(3)保護者を含むチームでの話し合い、(4)周囲の児童とその保護者への啓発、が挙げられている。小学校保護者の自由記述でも、子育てで工夫していることについて教師に相談するなど学校を含めた社会的な支援の利用に関する記述は見られなかった。

「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育的支援体制整備ガイド」では、学校と家庭の協働について、保護者に対しても「子どもの教育で不安なことや子どもが困っていることがあれば、学校と相談し、子どもの教育のために学校と協力して取り組む（協働する）ことで、子どもの困っていることや不安を軽減することにつながります」と述べられている。

しかし、瀬戸は、教師と保護者の間には子どもの問題状況に関する課題意識の「ズレ」や、必要としている情報の「ズレ」が存在していると述べている<sup>9)</sup>。児童の行動に気になる様子が見られる場合、教師は早期に気づき保護者と情報を共有し共通理解を持つことが重要であると考えられる。

教師は児童の行動に気になる様子が見られる場合、保護者が児童の行動や特性への理解を深め教師と共通理解をもち連携していくうえで、専門家によるグループでの学びや支援の利用が効果的であると考えていた。実際に小学校保護者が利用している子育てや教育に関する情報を得ている方法は、教師が効果的と考えている方法とは



異なり、保護者の身近にいて児童のこともよく知っている信頼できる家族や友人、インターネットやSNSのような時間や距離を気にしなくても情報を得ることのできる方法であった。

子どもを取り巻く問題に直面し、円滑に問題に対処することができない場合、保護者は抑うつやストレスが高まると考えられ、「子どもについての知識」、「社会的支援」、「肯定的捉え方」を活用することで養育者や子どもに合った養育行動や専門機関への相談などの適切な対処を選択することが考えられると、養育レジリエンスのモデルについて報告されている<sup>10)</sup> (図2)。教師が効果的であると考える支援の効果を検証するために、小学校保護者と親の会保護者の養育レジリエンスについて比較検討したところ、小学校保護者より親の会保護者は、養育レジリエンスが向上していると考えられた。この効果は親の会での専門家からの学びや仲間との活動による効果と考えられ、教師の考える効果と合致していた。また、教師に対しても、様々な教育的ニーズに保護者と連携して対処するために保護者とのいいねいな情報のやりとりと、研修を深めることが求められるものである。

学校と家庭が児童の行動や性格、特性に関する知識と向き合い方に関して共通理解を持って指導や支援を行うためには、教師自身も研修を深める必要がある。教師の研修について、文部科学省は特別支援教育に関する教職員の専門性の向上について、学校設置者においては、すべての教職員に対して、各種の研修等を通じて、障害に対する理解や特別支援教育の内容についての知識の涵養に勤め、特別支援教育が適切に実施されるよう勤めていくことが重要であると述べている<sup>8)</sup>。

教師と保護者の児童へのかかわり方に関して、岩坂らは、保護者がペアレントトレーニング(支援利用)終了後に一旦行動面や情緒面の改善が見られた子どもも、日常生活の大半を占める学校生活において壁に当たってしまうことが少なくない。それだけに教師がAD/HDをはじめとする特別な支援の必要な子どもの理解とかかわり方について、保護者と共通した認識を持ち、一貫した対応を行なっていくための戦略が必要であり、効果が期待できると述べている<sup>11)</sup>。

本研究での親の会保護者への自由記述においても、教師の児童へのかかわり方に対して、家庭との一貫性や学校全体の中でも担任教師による違いのあることに保護者が困り感を持っていることについて述べられていた。保護者が子育てについて学び様々な支援を利用することで養育レジリエンスの向上による効果として教師との情報の共有や児童への教育的ニーズや保護者の抱える不安や子どもが困っていることについても相談し、教師自身も児童へのかかわり方について家庭と学校との共通理解を持つことで児童への指導や支援において学校と家庭の連携と協働が行われることが期待できると考えられる。

## VI. 結語

本研究では小学校教師、保護者、親の会保護者に質問紙調査を行ない、養育レジリエンスの観点から分析した。児童の教育的ニーズに応じた指導や支援のために学校と家庭が連携するうえで、小学校教師が保護者に期待する子育てについて学ぶ方法や支援利用と、保護者の実状に相違があることが分かった。

教師が保護者に期待する子育てについて学ぶ方法や支援利用による効果は、親の会保護者が実践している活動を通して獲得したと思われる養育レジリエンスに類似していた。

小学校保護者が小学校教師、臨床心理士、医療、教育などの専門家や、保護者同士がグループで参加する機会様々な支援を利用することによって、保護者の養育レジリエンスの向上につながると考えられる。また、教師は家庭と連携するだけでなく、地域医療や福祉、心理専門家と連携して保護者の養育レジリエンスへの支援を行い、研修によって専門性を向上し、保護者と共通した認識を持ち、家庭との一貫した対応を行なっていくことが重要であると考えられる。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、データの分析にご協力いただきました福岡女学院大学大学院准教授赤間健一先生に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 稲垣真澄、山下裕史朗、渡部京太：発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究。厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業。平成24～26年度総合研究報告書、1-9, 2015
- 2) 笠井孝久：教育相談に対して教師が直面する困難。千葉大学教育学部研究紀要65, 187-197, 2015
- 3) 大谷大学：幼児教育・小学校教育に関する保護者の意識調査2019。1-12, 2019
- 4) 山口豊一、飯田順子、石隈利紀：小学校の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(学生版)の開発。日本学校心理学会5(1), 49-58, 2005
- 5) 嶋田洋徳：小学生用学校ストレスサー尺度。心理測定尺度集IV。サイエンス社、1998
- 6) 国立教育政策研究所：平成29年度全国学力・学習状況調査の調査問題・正答例・解説資料について。平成29年度小学校第6学年児童質問紙。文部科学省。2017
- 7) 岡村章司：学校の先生への保護者支援のススメ。発達教育2020(2), 4-11, 2020
- 8) 文部科学省：発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育的支援体制整備ガイド～発達障害等の可能性の段階から、教育的ニーズに気づき、支え、つなぐために～。2017
- 9) 瀬戸美奈子：子どもの援助に関する教師と保護者と連携における課題。三重大学教育学部研究紀要64, 233-237, 2013

- 10) 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター (NCNP)：発達障害児の育児適応に重要な三要素が世界で初めて明らかに～「養育レジリエンス」に着目～. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター (NCNP) プレリリース, 2015
- 11) 岩坂英巳、池島徳大、小野昌彦、久松節子、藤原壽子：学校現場におけるペアレント・トレーニング教師版の試みー特別なニーズのある子どもへの対応としてー. 教育実践総合センター研究紀要14, 141-145, 2005